



# 山口育児院だより

編集・発行 / 社会福祉法人 山口育児院 2019.11.第41号  
 〒753-0082 山口市水の上町5-27 Tel 083-922-1027 Fax 083-922-2389  
 e-mail y-ikuji@estate.ocn.ne.jp URL http://y-ikuji.sakura.ne.jp/

山口育児院の理念は「こころ、慈・和・直」といいます。簡単に言えば「こころ豊かな人間になる」ということですが、このこころの豊かさが福祉でいう「幸せ」だと考えます。ではどうすれば幸せになれるのでしょうか？

幸せを感じるには二つの方法があります。一つは我々の欲望を満たすことです。欲しい物が手に入った時やお金を儲けた時などに幸せを感じます。ただし、この方法は分かりやすいとは思いますが、欠点もあります。一度欲しい物が手に入った時に、それで終われば何の問題もありません。その時点で満足度100%です。しかしほとんどの場合、さらに次の欲望が出てきます。そうすると、その瞬間、満足度は100%から0%に下がってしまいます。その繰り返しになってしまふのが欠点です。もう一つの方法は、欲しい物を少なくすることです。「少欲知足（欲を少なくして足るを知る）」という考え方ですが、これは今自

## こころの豊かさは

分に与えられているもので十分ですというところを知ることです。そこで満足できれば100%から下がることがありません。そういう幸せの感じ方もあります。

弊院の理念にいうこころの豊かさとは、後者の幸せです。欲しい物を少なくするというのは、口で言うのは簡単ですが大変難しいことだと思えます。しかし、もっともつとつと欲を追いかけ続ける生き方はこころの休まる暇がありません。ゆつたりとした、こころに余裕のある毎日のほうが幸せだということには誰も納得できるのではないのでしょうか。

少欲知足とは欲望を失くせということではありません。文字通り「欲を少なくする」ということに付き合うということですが、今から30年近く前に、永六輔さんにお会いしたことがあります。永六輔さんは学生時代の同級生と同窓会組織を作っておられて、年会費を集めておられました。しか

しその会費には一切手をつけずに貯めておられたそうです。その理由を問うと永六輔さんは、「私たちはこれから年をとるにつれてだんだんと亡くなる者が出てくる。一人減り二人減り、そして最後に生き残った者がこの会費を総取りするんだ。そうすると少しでも長く生きようと頑張れるんだよ」と笑いながら仰いました。これはお金に対する欲がもしもありませんが、誰も傷つけることはありません。皆がそれを上手に利用しながら楽しく生きていこうと思える、欲と上手に付き合つてほしい智慧だと思えます。永六輔さんはお寺に生まれ育った方で、当時私は修行中の雲水でしたが、本当に大切なことを教えていただいたと今でも感謝しています。

誰もが永六輔さんのようなこころを持てるわけではないかもしれませんが、幸せを求めると本当に大切なことだと思えます。何かにつけスピードを求められる世の中ですが、少しでも幸せに近づけるように、こころ豊かな人間になれるように、時には立ち止まって日々の生活を見直してみることが必要であると感じています。



## 子どもの詩 ～ 意見箱より ～

山口育児院には子ども達の意見や苦情を受け付ける「意見箱」を設置しています。様々な意見が入ってきますが、今年、ある児童から変わった投書がありました。それは意見でも不満でもなく、自作の詩でした。とても上手な詩なのでここに原文のまま御紹介します。

ねとながよく  
 いえをきて  
 あそんでいけば  
 ねがくる  
 よくけんかするけど  
 たまには  
 なかよくすると  
 きもちがいいね

エフマ大王 作

この二つの作品はどちらも同じ児童が作ったものです。この詩のように仲良く、そしてポジティブに毎日を生きることができたら素敵です。この子のこころの内を見ることができたような気がして嬉しくなりました。

いいことたくさん  
 けんかして  
 きずだらけになるほど  
 ゆづじょうができる  
 けんかもするけど  
 なががいいのなら  
 それでいい  
 かんがえるな  
 やりたいことをやろう  
 そしてたのしく  
 できるよになつて  
 はばだけじぶん

## 歩々清風

今年9月に、臨済宗青年僧の会の方が洞春寺に「不二」の取材で来山されました。今回は児童福祉に焦点を当てて、100年以上の歴史がある山口育児院を運営している洞春寺、そして仏教と福祉という視点で取材をして頂きました。

昨今、虐待等で幼い命が奪われるという悲惨な事件が後を絶ちません。臨済宗青年僧の会の会長さんもその中で非常に心を痛めておられ、我々は一宗教者としてどのように受け止め、考えていけばよいのかと、本心に熱心に取り組んでおられました。

理事長と二人、「猶在半途」です。答えは見つかっていません。しかし、子どもの養育に対する今の率直な想いをお話させて頂きました。

仏教と福祉。とても大切なテーマだと思えます。会長さん他、皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

(丁)

## 御案内

育児院では、地域の方々に施設を利用していただく為に、いろいろなサービスを実施しています。

**トワイライトサービス**  
 仕事の関係で帰宅が夜間になる方、お子さんの下校時より仕事終了時迄お預かり致します。

**短期入所サービス**  
 病氣、事故、出産等でお子さんの養育が難しくなつた時等、短期間お預かり致します。

当院をご利用ご希望の方はお気軽にご連絡下さい。又ボランティアの受け入れもしております。

福祉に関心のある方、是非一度ご来院下さい。





# スマイルキャンプに行ったよ！ ～ 徳地青少年自然の家 ～

今年は夏と秋の二回、徳地青少年自然の家でのスマイルキャンプに参加しました。

秋のキャンプでは、初日はマウンテンバイクやハイキング、グラウンドゴルフ等を楽しみ、夕食後にはキャンプファイヤーを体験しました。二日目にはピザ作りをし、できたてのピザを食べ、午後からはまたマウンテンバイク等で駆け回りました。夏に行った時は初めて経験することが多かったのですが、今回は夏にキャンプそのものを経験済みなので、みんな大自然の中で思う存分遊ぶことができたようです。

山口育児院の周りには自然がいっぱいありますが、それでも普段はなかなかこうして自然の中を走り回る経験はできません。山口育児院の子に限らず、最近の子どもの遊びといえばゲームが主流なのではないかと思いますが、キャンプではテレビもゲームもありません。それらが無い環境で過ごすことそのものに大きな意味があるの

ではないでしょうか。今時の子ども達のことです。テレビやゲームがなくて不満が出るかなとも思いましたが、実際に行ってみるとみんなそれなりに自然に馴染んでいました。また、夏は暑く、秋は少し寒かったものの、それも大自然ならではの、いかに普段の生活が恵まれているのかを知る良い機会にもなったように思います。

自然の中で遊ぶこともそうですが、おそらく今は薪を割る、火をつけて燃やすということもなかなか



か経験することができません。昔であれば家に五右衛門風呂があり子どもが風呂焚き当番をしていたということもあつたでしょう。その日に焚く分の木を拾ってきて、割り、お風呂を焚く。そういう経験をしてきた者は難しい理屈は分からなくても上手に火をつけて燃やすことができます。ところが、そういう経験がない子は、火を燃やすには空気(酸素)が必要だということも頭ではわかっているでしょうが、実際に燃やそうとしてもなかなかうまくいきません。いろいろと試行錯誤しながら取り組むのも本当に良い勉強になります。

「冷暖自知」という言葉がありますが、やはり何事も自分で経験してみないと身につけません。

また、冷暖房のない環境で、夏の暑い日にどうすれば涼をとれるか。肌寒い日にはどうすれば暖をとれるか。一つ一つが本心に勉強です。それらを経験していくと、何事も自分ひとりでは限界があることを知ります。それを知れば、



周り協力していく大切さを学ぶことができます。「協」という字は十方の人々と力を合わせるという意味があります。みんなと力を合わせることによって楽しく幸せに過ごすことができるということも少しも感じてくれたなら、このキャンプは大成功だといえるでしょう。

おかげさまで、怪我もなく、大きな喧嘩もなく、楽しく過ごせました。徳地青少年自然の家のスタッフの皆様、本当にありがとうございました。



# 現実世界の適応と心の世界の適応 ～ 児童と関わる中で学んだこと ～ 心理士 今城一敏

山口育児院にご縁をいただいで今年で5年目を迎えました。育児院での毎日の中で学んだことを述べてみたいと思います。

まず、足掛かりとして児童養護施設の心理職の業務についてご説明します。私は普段子ども一人ひとりと1時間程度の個別の時間を設定して、心理療法室という定まった空間での心理療法を行っています。

心理療法というと何か特別なことをしているように思われるかもしれませんが、しかしその中では一緒に遊んだり会話をしたりといった、一見するとごく日常的な営みを行っています。そして、その関わりの中で子ども達の「こころ」の状態を理解することに心血を注いでいます。さらにその理解に基づいた上で、その理解に適った言葉や行動を相手に伝え返していくというプロセスを行っています。

この「理解に基づいた応答」が所謂「共感」に繋がるものだと考えています。人は共感されることを通して自己理解を深め、心の成長

が促されるという仮説に基づき、この営みを繰り返し続けている毎日です。

このような営みを日々繰り返す中で、私自身が子ども達を含めた「人間の理解」ということについて学んだことがあります。それは、「現実の適応」と「心の中の適応」を考える、ということでした。

心理療法で特に幼い子どもとの間でよく起こる事象として、「退室しづり」があります。面接の終了時間になってもまだ遊びたいという気持ちを収められず、退室することができない状況のことをいいます。この状況では現実的には時間を守って退室させるといことが必要になります。事前にこちらから何度か見通しを伝えていくので、子ども自身も分かっているはずですが、しかし、子ども自身の「心の中の時間」はまだ心理療法の時間の中で遊びたい、この時間をずっと続けていたいという思いに駆られるらしく、なかなか素直に退室してくれないことが多いで

す。このような退室の場面だけを見て、現実の適応と心の中の適応の間でせめぎ合いが起こっており、その二つの適応の間でなんと難しい状況が起こるといことが理解できます。このような難しいことが心理療法室の中だけなら問題ないのですが、生活場面、教育場面、人間関係の中でも姿形を変えて起こっており、それが状況に対する「不適応」の問題になっていくことは少なくありません。先程の退室しづりの例ですと、こちらの現実的な要求と、子どもの心の中での要求とに、落としどころ、すなわちお互いの「妥協点」を見つけていく作業を通して、折り合いをつけていくことが重要となつてきます。

私たちは普段、子ども達が現実の適応でうまくいかない場面に起こる、表面上の行動や言葉に惑わされてしまいがちのことが多いように感じます。

今年度より、臨床心理学を専攻する大学院生を受け入れて、施設

での実習を受け持つことになりました。実習指導という、人にものを教えるという経験の中で、自分の未熟さを痛感しています。実習の一環として、施設長先生に育児院の理念と基本方針について講義をいただく時間をお願いしており、自分も大学院生と一緒に参加しています。その中で施設長先生より、宮本武蔵の五輪の書からの引用で、「観の目強く見の目弱し」という言葉について教わることがありました。曰く、私たちは自分の目に見えるものに囚われてしまいがちだが、物事の本質は「観の目(心の目)」で観ることによって本当に理解することができるということです。観の目は観音様の目だと言われました。観音様の目と同じ見方をすることは今の自分には到底できません。しかし、少しでも観の目にならない、目先の事象にばかり囚われず、子どもの本当の心の声を聴いていけるよう励んでいきたい、そう思い心新たにするところでありました。